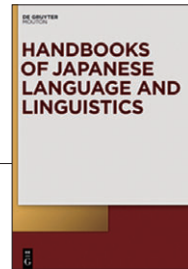


**著書紹介** Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama (Series editors) HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series

著者	影山 太郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	6
号	2
ページ	47-49
発行年	2015-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000786">http://doi.org/10.15084/00000786</a>

**Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama (Series editors)**  
**HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series**

2015年1月 - . Berlin: De Gruyter Mouton



影山 太郎

世界諸言語の中で最もよく研究されている言語は何かご存じでしょうか。当然、英語ですが、日本語もかなり上位に入ります。しかしそれは、日本国内の国語学・日本語学の研究が世界にあまねく知れ渡っているという意味では決してありません。それどころか、日本語で書かれた国内の研究書・研究論文は、世界の言語学研究者の眼にはとまらず、ほとんど引用されることがありません。

海外で日本語がよく研究されていると言われるのは、1970年代、1980年代に生成文法理論の枠組における日本語研究が米国で精力的に進められたことに依ります。当時は日本経済の急成長と呼応して、多くの日本人が米国に渡り大学院で理論言語学を専攻した時代でした。しかし非公式な調査によると、米国の主要な大学院言語学科（15校）における日本語関係の博士学位論文は、1960年～1985年の43件から1986年～2000年には108件に増加したものの、2001年～2014年には65件に下落したという結果が出ています。海外における日本語言語学の再生が望まれます。

さらにまた、伝統的な国語学・日本語学の枠組に基づく国内の研究と、海外での理論的研究とでは、分析のアプローチや背後にある言語観が大きく異なります。そのため、海外（特に欧米）で言語学の観点から日本語を分析する研究者は、日本人でも外国人でも国内の文献には疎く、逆に国内の国語学・日本語学の研究者は海外の論文を手にするのはほとんどないという、コミュニケーションギャップが生じています。英語が成果発信の国際語になっている理系諸分野と異なり、日本語の研究に関しては、発表演語として日本語を使うか英語を使うかがコミュニケーションの大きな溝を作っているのです。

ここに紹介する Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series（英文日本語研究ハンドブックシリーズ）は、国立国語研究所がドイツ・De Gruyter Mouton社との学術協定（2012年）に基づいて企画したもので、日本語に関する国内外の主要な研究文献を網羅的、批判的にレビューし、将来の研究への展望を示すことで、国内の研究と海外の研究との橋渡しをするとともに日本語研究の意義を全世界に伝えることを目的としています。取り上げられる研究文献は、日本語で書かれたものも英語（その他の外国語）で書かれたものも含まれ、また、出版地も国内・海外の両方が含まれます。したがって、本シリーズは、国内から海外へという一方向の発信ではありません。過去・現在において全世界で発表された先導的な研究を展望することで、国内と海外を双方向的に結び付けるものです。

国立国語研究所は、独立行政法人から大学共同利用機関に生まれ変わった際、科学技術・学術審議会学術分科会「国語に関する学術研究の推進について」報告（平成20年7月）では改革の基本方針の一番目として「1. 我が国の国語である日本語を世界の諸言語の中に位置づけ、その特質と普遍性の研究を推進する国際的研究拠点とする。」という位置づけがなされました。研究所では国際シンポジウムを多数開催する等、国際的拠点性を高める活動を展開していますが、本シリーズの刊行もその一環です。1970年代から日本語を研究軸とした理論言語学を開拓し、日本語研究の国際化に個人レベルで取り組んできた2人のシリーズ編者（柴谷方良、影山太郎）は、この重要な事業を担当する機会を得たことを学者として大きな誇りと感じています。

本シリーズの構成を見てみましょう。現代日本語の音声・語彙・文法・意味をコアとして、日本語史、方言、社会言語学、心理言語学、応用言語学の各領域に及び、さらに琉球諸語とアイヌ語を独立の巻として、合計12巻の構成になっています。いずれの巻も、それぞれの領域における主要な研究テーマや記述的・理論的課題を網羅し、また、応用言語学の巻には日本手話に関する章も含まれます。各巻の執筆にあたっては、本研究所に関係する研究者を中心とする編者の下で国内外の第一線の執筆陣（各巻15～30名）が章を担当し、内部あるいは外部のピアレビューを経て最終原稿の完成に至ります。ページ数も、それぞれの巻が600～700ページにのぼり、1つの言語に関する書物としては規模、対象の範囲と深さ、学術的水準において、まさに世界に類のない包括的なハンドブックです。

1. Bjarke Frellesvig, 金水敏, John Whitman (編) *Handbook of Japanese Historical Linguistics* (日本語史ハンドブック)
2. 窪菌晴夫 (編) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (音声学・音韻論ハンドブック, 2015年刊)
3. 影山太郎, 岸本秀樹 (編) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (レキシコン・語形成ハンドブック, 2016年予定)
4. 柴谷方良, 宮川繁, 野田尚史 (編) *Handbook of Japanese Syntax* (統語論ハンドブック)
5. Wesley M. Jacobsen, 田窪行則 (編) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics* (意味論・語用論ハンドブック)
6. Prashant Pardeshi, 影山太郎 (編) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (対照言語学ハンドブック)
7. 木部暢子, 新田哲夫, 佐々木冠 (編) *Handbook of Japanese Dialects* (方言ハンドブック)
8. 井上史雄, 宇佐美まゆみ, 朝日祥之 (編) *Handbook of Japanese Sociolinguistics* (社会言語学ハンドブック)
9. 中山峰治 (編) *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (心理言語学ハンドブック, 2015年刊)
10. 南雅彦 (編) *Handbook of Japanese Applied Linguistics* (応用言語学ハンドブック, 2016年予定)
11. Patrick Heinrich, 宮良信詳, 下地理則 (編) *Handbook of the Ryukyuan Languages* (琉球諸

語ハンドブック, 2015 年刊)

12. Anna Bugaeva (編) *Handbook of the Ainu Language* (アイヌ語ハンドブック)

このうち、第2巻「音声学・音韻論」、第9巻「心理言語学」、第11巻「琉球諸語」が2015年前半に刊行され、引き続き、第3巻「レキシコン・語形成」と第10巻「応用言語学」が2016年初頭に姿を現すはずです。

冒頭で、日本語研究に関する国内と海外のコミュニケーションギャップに触れました。実際に編集作業を進めていく過程においても、そのことが実感されることが少なくありません。とりわけ、普段は日本語で論文を書いている研究者が英語で書こうとすると、うまく行かないことがあります。それは、英語が苦手だという単純な話ではありません。実際、日本語で書かれた論文を英語のネイティブスピーカーがそのまま英訳しても、出来上がった英語論文は、読んでも分からないという結果になることが多いのです。国内と海外（西洋）のギャップは、使用する言語の違いにとどまらず、論文を書くときの思考様式の違いでもあるのです。個人を主体として論理明晰な結論を重視する西洋文化で産出された論文と、社会の協調性を尊び、論理明晰な結論をむしろ避けようとする日本文化の中で生まれた論文では、ロジック（論旨の組み立て方）が異なるのは当然です。言語とロジックの壁を越えて、日本語研究を世界の人々に伝えるにはどうすればよいか。まさに、各巻の編者の腕のみせどころです。期待して、見守っていただきたいと思います。

### 影山 太郎 (かげやま・たろう)

国立国語研究所長。Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学)。関西学院大学名誉教授。2009年10月より現職。

主な著書・論文：『文法と語形成』（ひつじ書房、1993）、『動詞意味論』（くろしお出版、1996）、『ケジメのない日本語』（岩波書店、2002）、『名詞の意味と構文』（編著、大修館書店、2011）、*Transitivity and valency alternations: Studies on Japanese and beyond* (共編、De Gruyter Mouton、2016年予定)。

受賞：市河賞（財団法人語学教育研究所、1980）、第22回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会、1994）。

社会活動：日本言語学会顧問（元会長）・評議員、財団法人日本国際教育支援協会理事、特定非営利活動法人言語資源協会理事。